

旧入声の北京語声調に関する Edkins の記述

中村雅之

1. 『中原音韻』と北京語の声調

元代の『中原音韻』の声調体系が、現在の北京を中心とする北方音の体系の祖型と見なしていることはよく知られている。切韻系韻書などに見られる伝統的な「平声・上声・去声・入声」ではなく、「陰平・陽平・上声・去声」になっている訳であるが、『中原音韻』では旧入声が他の声調へと派入する条件は非常に明確である。すなわち、声母の清濁により、清音声母を持つ場合には「上声」、全濁音は「陽平声」、次濁音は「去声」となっている。これに対して北京語の場合には、全濁音と次濁音の状況は同じであるが、清音の場合が著しく異なっている。清入声は、北京語では「陰平」から「去声」まで全声調に、一見無原則に派入している。この複雑な状況に一定の説明を与えたのが、1960年以後の平山久雄氏による一連の研究であった。

2. 旧清入声の派入条件

平山(2005)によって要点をまとめれば、次のようになる。旧清入声はおおむね北京語の口語音では陰平と上声に、文語音は陽平と去声になった。口語音においては本来は『中原音韻』におけるようにみな上声であったが、直後に軽声音節が続く場合に連続変調により陰平へと変わった。「子」など軽声の接辞を従える名詞の多くが陰平になるのはそのためであり、動詞のほとんどが陰平になるのも、動詞の場合はその直後に「了・着」などの軽声音節を従えることが多いからである。

まことに説得力のある論である。この論の根本は、口語と文語の層を分けた点にあるが、口語音が陰平と上声になる傾向をもち、文語音と対比をなすことを指摘したのは平山氏によれば Forrest(1950)であった。平山説はフォレストの着想を発展させて精密に理論化したものと言える。そして、そのフォレストよりはるか以前、同じ英国人のエドキンズによって、平山説へと開花すべき萌芽はすでに現れていたのである。

3. エドキンズ(J. Edkins)の記述

Edkins(1862)の巻末に「Tones of the Peking Dialect.」と題する補遺が付いている。15項目からなる。内容はおおよそ次の通りである。(1)~(4)は各声調の調値。(5)~(9)は旧入声について。(10)(11)は軽声について。(12)は陽平声では通常有気音声母が現れるが、入声由来のものはそうではないこと。(13)は陰平声に声母「l, m, n, r, j」が現れるのは俗語に限られること。(14)は児化について。(15)は「一」と「不」の声調について。

以下には、旧入声に関わる(5)~(9)について詳しく見ることにしたい。全文を日本語に訳して提示するが、声調の呼称に注意されたい。我々の「陰平」は「上平」であり、「陽平」は「下平」である。また、エドキンズは南京官話の声調体系を北京語の説明にも用いているため、数字で呼ぶ場合、以下ようになる。

第1声「上平」 第2声「上声」 第3声「去声」 第4声「入声」 第5声「下平」

(5) もともと第4声すなわち入声に属する語(words)は、話し言葉においては、以下の様な方式で他の声調に分配される。

旧来の調類	声母	北京語の調類
陰入声(Upper juh sheng)	k, t, p, s, ts, ch, h, w, y.	上平
陽入声(Lower juh sheng)	k, t, p, s, ts, ch, h.	下平
陽入声(Lower juh sheng)	l, m, n, j, w, y.	去声

以上は一般原則であるが、例外も非常に多い。例外は大部分、以下に(6)~(9)として挙げた細則に従う。

(6) 主として実詞で、声母にk, tなどをもち、しばしば単独で用いられる語の多くは、第2声すなわち上声で発音される。[脚注：単独で発音すべき語は自然に第2声を取る。それは北京では非常に明瞭に発音される。]例)血、百、鐵、尺、北、塔、脚、筆[ローマ字表記と訳語は省略]、「曲」(c'hü(1)「曲がった」、c'hü(2)「うた」)のように、普通は第1声ではあるが、特定の意味の場合に上声を取る語も多い。

(7) 書き言葉から取り出され、単独では用いられず、あまり口語的でない語は、第3声すなわち去声を好む。例)特、確、朔、設、客[ローマ字表記と訳語は省略]ある語は「攔」(ko(1)「おく」)のように、一般的な口語の意味では第1声を取るが、「耽攔」(tan(1)ko(3)「おくれる」)のように熟語で別の意味になる場合にはしばしば去声を取る。

(8) ある音節は第5声すなわち下平を好む。例) chu, chi, chī, fu, ko, tse, te. 福 fu, 得 teh [ママ]など。

(9) 入声の語の多くは上の諸原則に従うが、それらの読書音は去声である。これはとりわけ口語で第1声および第5声に属する語において当てはまる。それらは全て、詩に用いられた時には、去声の抑揚で読まれる。詩においては、入声の語は、上声で読まれる若干の例外を除いて、全て去声に変換されるのである。

4. 評価

最初の平山論文が世に現れる100年近くも前に、エドキンスが旧入声の北京語における派入状況について、かくも精密な記述を行っていたのは賛嘆に値する。エドキンスが口語音と文語音を峻別する意識を持っていたことは明らかである。とりわけ(7)は、同じ字でも口語音と文語音で声調を異にする例を挙げ、文語音が去声を取る傾向を示している。(9)は平山(2005)にE層として分類され、「人口読音」の可能性ありとされたものに相当する。(6)は「単独で」用いられることを強調している点から、口語語彙を意識した記述と考えられる。

方言研究、音韻史研究におけるエドキンスの業績は、まだ十分に汲み尽くされていないのではあるまいか。

<参考文献>

Edkins(1862), *Progressive Lessons in the Chinese Spoken Language*. Shanghai

Forrest(1950), *The Ju-sheng Tone in Pekinese*, *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*. 13

平山久雄(1960)「中古入声と北京語声調との対応通則」『日本中国学会報』12

平山久雄(2005)「中古漢語的清入声与北京話声調的対応規律」『平山久雄論文集』(北京：商務印書館)